



戦争体験を語る(要約) 柴田隆一さん

大正15(1926年)生まれ 88歳
森町在住(1936年以後長く挙母町に在住)
紋章上絵師 元市議会議員 4期

1 挙母神社の側ですごした子どもの頃のこと

生まれたのは瀧脇の桂野。家庭の事情で転校を数回し、5年生からは挙母小学校へ。当時、農家でない人はトマトは口に入らず、死ぬ前に食べるものだと思っていた。リンゴやバナナも滅多に口には入らなかった。ラムネやサイダーは年寄りが死ぬ前に飲んでいた。

奉安殿は校庭の東の隅にあった。朝礼では、校長先生の号令で廻れ右をして拝んでいた。

出征兵士を送るため、挙母神社が利用された。昭和13年の壮行会は盛大だった。6年生の時、盛大な出征兵士の壮行会が挙母神社で行われた。たくさんの人が集まって旗を持って行列を作り挙母駅まで見送った。小学生を先頭に、「見よ東海の空明けて～」を歌いながら行進した。

当時、挙母神社の周りには家があったが、家が残っているのは、私の家と向かいの以前古本屋さんの2軒だけ。南側はずっと田んぼと桑畑ばかりだった。今の市役所の辺りも田んぼだった。(9割が田、1割が桑畑)この田の持ち主は樹木町の人達だった。昔、ここに住んでいたが洪水のため、住まいは高台の樹木町に引っ越した。我が家の隣は畑、豊信のあたりは原っぱで、草野球をしたり角力巡業が行われたりした。

1937年、岡崎中学校へ進学した。(当時はまだ挙母中学校はなかった。)5年間、定期券が買えないので、ほとんど砂利道を自転車通学(挙母町—天神橋—明大寺)。時々、1ヶ月電車通学ができた。中学校では陸軍配属将校が常勤し、週2回軍事訓練があった。予科練へ志願の誘いはあったが、志願をする気は起らなかった。1943年3月卒業。その後、宮口の深田さんが経営者だった、東京吉祥寺の吉祥寺精工へ就職をした。

2、軍隊生活

20年(1945年)3月繰り下げで19歳の者に召集がきたので、豊田へ帰る。(第一乙種合格)豊田へ帰ったのは三河地震(1945年1月13日午前3時38分発生)の直後だった。家族は庭でシートをかけて穴倉生活、百姓は藁小屋に住む。この時に、吉祥寺精工で働いていた高見さんが様子を見に豊田に帰ってきた。詳しく東京の友だちに様子を知らせる手紙をだしたら、スパイとして捕まった。

すぐに笠松に入隊。この時も挙母神社から送られたが、敗戦近くで見送りは町内の人20人ぐらいと寂しいものだった。私が子供のころの見送りとはい雲泥の差だった。兵舎はなく子供たちが疎開して空いていた小学校で生活をした。部隊は私たち19歳の少年兵と除隊後再入隊の50歳ぐらいのおっさんで、その人たちは厳しくもなく楽だった。入隊後 幹部候補生の願書を出した。のみやシラミと喧嘩ばかりしていた。訓練らしい訓練はできなかった。100人ぐらいの部隊で擲弾砲が5個ぐらい。**注:擲弾筒 小型の携帯用迫撃砲。手榴弾や発煙弾・照明弾などの発射に使用する。**銃の本体はなく、先に着けるごぼう剣だけ何本かあるだけだった。飯盒もなくざるに、にぎり飯をつめて、風呂敷につつま肩にからげて敗残兵のような恰好だった。

食料の計算をやらされた。正しく計算をしてあまると殴られ、ごまかしてもたたかれる。要領の悪い人はすぐ死んでしまう。軍隊は理不尽な所だと思った。軍隊には正義感なく、腐敗していた。

笠松に5ヵ月いて、8月はじめ御前崎に向かうことになった。アメリカ軍の上陸を予測し敵前特攻の予定だった。御前崎に向かう移動中に**8月15日**になった。玉音放送は聞けなかったが、上官が来て、「戦争が終わったから帰っていいぞ。」とそれだけ言った。大きな感慨もなく、やれやれ終わったのかと思った。隊に馬がいて欲しけりゃ馬に乗って帰ってもいいということで、馬に乗って帰った者もいた。私は食うものもない時、馬は養えないと思い、すしづめの電車で帰った。

3、戦後のこと

帰ってきてからは、ニコヨン(失業対策事業で日給が240円)として伊保原飛行場の解体作業に従事した。(1日240円の日当だったからニコヨンとよばれた)ずっと、生活は大へんと思ったことはないが、社会の格差や不正に対しては憤りを持っていた。要領のいいやつが楽な暮らしをしていることはおかしいと思った。関東軍の司令

部にいた中野中佐の話を聞いたことがある。双眼鏡で見ていると歩兵が倒れてく。それで、現場からすぐに逃げた。今度は砲兵がやられている。危ないと直ぐに満州から飛行機で東京に帰ってきたという。軍隊のいい加減さを知った。また、中野中佐は、終戦になり豊田へ帰る時は部下を使って、貨車に味噌・砂糖・油・米・衣料品などを一杯積み込んで三河線挙母駅まで運んだ。後に挙母支院の横に中野市場を建てて稼いだ。隠匿物資が騒がれる前のことだった。戦後は物がなく、特に金属が不足し、キセルも陶製だった。その後、独学で紋章絵師になり「柴田紋屋」を開店した。

4、今、伝えたいこと

戦争はどんな理由や理屈が付けられようがしてはいけない。犠牲者は99%は国民だから。戦争体験者より

* 柴田さんの句より

父逝きし5歳の記憶走馬灯
復員は死語になりたる終戦忌
縁切りし軍歌に会ふ花見酒
戦死父の遺影未だに若き春（15年3月作）

（2015年1月16日 美里交流館にて 富田好弘、八千代 お話を伺い要約）